

2021年10月10日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「力は神のもの～十十空襲の悲劇を覚えて」

聖書：詩編62：1～13

本日は「十十空襲」の日。1944年10月10日、沖縄戦の半年前。その日、日本軍は無警戒の中、早朝から米軍の戦闘機延べ1400機の襲来を受け、那覇は9割が焼け野原となり沖縄のほぼ全地域、北は奄美大島から南は宮古、石垣島までの南西諸島のほぼ全域にかけて爆撃が加えられた。死者600人超、負傷者900人超。

この「十十空襲」の後、沖縄に配備されていた関東軍（最強陸軍部隊）が沖縄を去る。沖縄の戦力は各段に低下し、沖縄の学徒隊・少年兵らにいつそう頼らざるを得なくなった。沖縄を守るよりも本土決戦に備えた。関東軍が沖縄を去る時、沖縄が見捨てられて行くという思いがあったという。

詩編62編からの言葉は、人間がどうしても頼りにしたい「力」に対して、「力は神のもの」とある。しかしこの世は、力があるものがこの世を支配し、力あるものが人間として認められるかのような世界。武力、財力、学力、・・・そのような「力」を行使し、用いることで人の上に立ち、他の人間を支配しようとする。その人間社会に対して詩編の言葉がどんなに意味を成すものか。この詩編の作者はダビデとある。ダビデは国を治める王である。王が「暴力に依存するな。力が力を生むことに心奪われるな・・・力は神のもの」と言い切ることは勇気のいること。時の王であれば「力は王のもの」と言ってもおかしくはない。

神は、ダビデという一人の王を通して、人の在り方を示す。人は、たとえ王様になったとしても、しっかりと神を見あげてを怠（おこた）らず、謙虚に「力は神のもの」であることを忘れてはいけないと教えている。

「ひとつのことを神は語り／ふたつのことをわたしは聞いた／力は神のものであり、慈しみは、わたしの主よ、あなたのものである・・・」（詩62:12,13）。それはまた、イエス・キリストの姿に置き換えても良いかと思う。イエスは、暴力的な支配者となるよりも、むしろ苦難のしもべとなることを選ばれた。武力によって勝ち取った正義よりも、むしろ死に至るまでの慈しみを私たちに現してくださった（フィリピ2:6）。キリストのお姿を見る時、如何に暴力的なものが神とかけ離れたものであるかを知らされる。あの十字架と復活の出来事に神の力を見、神の慈しみを見ていきたい。

人が上に、上にと這い上がろうとする中で、神ご自身は下に、下にと降りてくださっているところを見逃してはいけない。（神谷）